

【1】歴史探偵について

半藤一利(1930～2021)『昭和史 1945-1989 戦後篇』『昭和史 1926-1945』

歴史タレントを自称する。この「歴史探偵」は坂口安吾(1906-1955)からきている。半藤一利は坂口安吾の担当編集者だった(文藝界 2005年10月号『偽作『安吾巷談』靖国の神々』で安吾になりかわって靖国の神々を論じたエッセイがある)。

「歴史探偵」とはなにか?

(坂口安吾『歴史探偵方法論』昭和26年10月)

- ・歴史というものはタレントの作業と同じもの
- ・現代のタレント眼から見ると、日本の史家のタレント法はまったく神代的で、銘々が手前勝手に、幼稚というか拙劣というか、いくら書物をタクサン読んだって推理や立証の仕方に狂いがあって、推理力が劣等ならば意味をなさない。チミツで正確なタレント眼があってはじめて史料を読む仕事が生きた学問となる
- ・戦争に負けるまでは国撰の六国史(『日本書紀』『続日本記』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』)や古事記にケチをつけそのアヤマリを立証することは許されていなかった(中略)が、記紀の記事をもって史実を定め証拠の真偽の規準とするという方法に疑いをもたないタレントは信ずるに足らない。
 - ➡ 歴史はつねにときの為政者の都合によって「正史」として編纂される。[狂言回し]はときの為政者であった。歴史探偵はその「正史」を推理力で解きほぐし、ふたたび編みなおす。
 - ➡ 前回のガルシア・マルケス(1927-2014)『百年の孤独』では、ブエンディア一族の百年の歴史は、マコンドに文明をもたらしたメルキアデスという[狂言回し]によって、すでに綴られていたものだったことがあきらかになりマコンドは消滅する。読者はこの作品を読み、じぶんの人生が、だれかほかの[狂言回し]の筋書きにしたがっているだけではないかと、じぶんをかえりみる。歴史探偵は、ここを出発点としてほんとうの歴史を編みなおす。(マコンドの消滅は日本の戦後とも符合???)

【2】「焚書坑儒」について

p.15 始皇帝(前259-前210)は自分の権力を最大のものにするために、そのさまたげとなると思われるものはすべて抹殺した。墨子(前470年頃-前390年頃)の思想からして、墨家はみんな穴埋めにされて殺され、書物の『墨子』は残らず灰となったであろうことは想像に難くない。完全抹殺だな。

- ➡ 『墨子よみがえる』は、歴史探偵が、儒家を「正史」とした歴史によって焚書坑儒 = 埋没させられていた墨子の思想を、よみがえらせる(転生する)試みといえる。そして、現在わたしたちは、ゆきづまりをみせる「正史」を解きほぐす探偵を求めている、とさえいえる。[ロシア・ウクライナ、パレスチナ]

【4】墨子の思想の核心「兼愛」

では、歴史探偵によってよみがえる墨子の思想の核心はなにか。「兼愛」

- ・「正史」=儒家による墨家批判から。

「墨家の唱えている兼愛とは、自分の親も他人の親も同じように愛そうとするものである。これは君臣・父子の大道を無視するもので、禽獣の行いである。(『孟子』滕文公下篇)」

(湯浅邦弘【編著】『教養としての中国古典』所収 池田光子(松江工業高等専門学校助教)『墨子』p.135)

対して、墨子は

「儒家のように血縁関係による「愛」の軽重を設けると、「自分の一家を愛して他人の一家を愛さないから、他人の一家から平気で盗みを行う」(兼愛上篇)のような、天下が乱れる事態になると言う。そしてこのような「愛」は天下を害する根源の一つであるとし、「別(別愛)」(兼愛下篇)と批判的に表現している。(p.136)」

➡ 想起するのは「善きサマリア人の喩え」(※)

2023年12月20日 NHK「イスラエル イスラエル世論調査」

イスラエルのシンクタンク(民主主義研究所)が19日に公表した世論調査によりますと、軍事作戦を計画する際、ガザ地区の民間人の苦しみについてどの程度考慮すべきか尋ねたところ、ユダヤ人では△「少しは考慮する必要がある」と答えた人が41%、△「ほとんど考慮する必要がない」と答えた人が40%でした。一方、ガザ地区での軍事作戦でイスラエル軍が国際法などを守ろうとしていると思うかについては、91.5%が「守ろうとしている」と回答しました。

➡ 正しい法の名のもとに、ジェノサイドが全面展開している。

【5】いままさに必要な「兼愛」

p.43 天下の大害とは、『墨子』によれば、大国が小国を攻めること、大氏族が小氏族を凌辱すること、強者が弱者を食いものにすること、富者が貧民に横暴をはたらくこと、などなどである。それらが起こるのは、まず秩序を重んじて、人々にそれぞれ長幼・貧富・貴賤などランクづけをして個別に扱う「別愛」の立場であるからこそである。それは根本的に間違っている。その誤った立場をとるものは誰なるや、それは儒家なんである、と墨子はいきる。しかもその上で墨子は、「別は非なり」(別非也)ときびしく断言する。

➡ 逆説的だけれども、戦争は秩序を乱そうとなされるものではなく、むしろ、秩序が先立って、秩序のもとに天下の大害=戦争がなされる。

【6】現代の墨子、中村哲(1946-2019)

P.278 「今一番気に食わないのは、西洋的なデモクラシーを入れないと、人間は幸せになれないという驕りです。ならば江戸時代の女性は皆不幸だったか、私はそういう気がしない。その時代の枠組みのなかで、たとえば自分の気に入った気立てのいい男性と一緒にいられる幸せなどは、今と同じでしょう。たとえ男女平等の時代になっても、暴力をふるう男性と一緒になれば不幸です。そういうことは言わずに、経済や社会体制が変われば至福がくるかのような風潮です。人を殺してまでその体制を入れる必要があるのか、これを言うと叩かれるので、あまり大声で言わないようにしています」

[叩く] 男尊女卑や、士農工商の身分制度を正当化するのか、けしからん!

[中村意識] いや、それぞれの枠組みのなかにおいても、人びとのくらしのなかには具体的な実践がある。むしろ、西洋的なデモクラシーに「別愛」があるのだ。]

➡ つまり、人のくらしはただひとつの規範(西洋的なデモクラシー)によって成り立っているのではない。つねに複数のそして具体的なネットワークによって編みあげられている。歴史探偵は強引に縊られ束ねられた歴史を解きほぐし、ふたたび編みなおす。すなわち「兼愛」

【7】「汝らの仇を愛せよ」 p.41

あまねく人を愛すること「仇を愛せよ」はロマン主義、性善説としばしば揶揄される。

○儒家にとって、「兼愛」は「禽獣の行い」であった。君臣・父子は大道を重んじる。

○(國分功一郎『スピノザ』)「獣の道」に陥らないよう、「社会契約」を拵えたのが17世紀以降の近代の起点。

○(小川さやか『「その日暮らし」の人類学』)「その日暮らし」ではままたまらない。「その日暮らし」を下支えする「社会的なもの」はアテにならない。国(家)による社会保障制度や、老後資金を!

➡ 人間の人間にたいする[不信] がセットされているようにみえる。とかく近代の起点においては。

そして「人はアテにならないよ」「それは性善説だよ」というシニカルなものいいこそが、「兼愛」の実現を阻んでいるようにみえる。臆病にみえる。むしろ、勇気をもって「兼愛」を具体的に実践すること。そのことが愛を喚起する。すなわち、愛は愛に応えようとする。

【8】「兼愛」の分析

○カール・マルクス (1818-1883) (『市民社会における貨幣の権力』ちくま哲学の森 所収)

現存しつつみずからを確証していく価値概念としての貨幣は、あらゆる事物をすりかえ、ごまかすのだから、それは、あらゆる事物の一般的すりかえとごまかしとに、したがってあらゆる自然的・人間的性質のすりかえとごまかしたる転倒された世界にはかならない。

勇気を買うことのできるものは、たとえ臆病だったとしても、勇敢である。(略)それは、できぬことどうしの融和であって、矛盾しあっているものどうしに接吻をしいる。前提が人間としての人間であり、また世界にたいする人間的な関係としてのかれの関係であるような場合には、きみは愛情をもっぱら愛情とのみ、信頼をもっぱら信頼とのみ交換できる。(略)もしもきみが、相手の愛をよびさますことなく愛したとすれば、すなわちもしもきみの愛が愛として相手の愛をよびさまさなかったとすれば、もしもきみが、愛する人間としての生活表明を介して、愛されている人間になることがなかったとすれば、きみの愛は無力であり、一つの不幸である。

マルクスのいいかたはややこしい。しかし「兼愛」と「別愛」をよこにおくと、ずっと腑に落ちるようだ。

まず、マルクスが「愛されている人間になることがなかったとすれば」と、受動態の愛を記すように、愛には「愛する」という能動態と、「愛される」という受動態のふたつの局面がある。これを墨子の「兼愛」に託せば、「あまねく人を愛する」というのは、じつは、じぶんじしんが「あまねく人に愛される」ということをもふくむことになる。そして人は、「あまねく人を愛する」よりまえに、「あまねく人に愛されている」。どういうことか。

人は生まれるまえから、なにものか(日本人やウクライナ人、ユダヤ人等等)であったわけではない。つまり、なにか条件があって生まれ、存在しはじめたわけではない。むしろ、なにものであっても赦されていた=愛されていた。条件は、生まれたあとで付与されたものだ。人の存在のはじめには、このような無条件の愛の享受がある。じぶんじしんは「あまねく人に愛されていた」ということの結果であった。要するに、じぶんじしんの存在こそが、「あまねく人に愛されていた」ことを証し立てている。

ゆえに、なにかの条件があって愛する(=別愛)というのは、端的に、じぶんじしんを否定することになる。自己否定となる(ゆえにマルクスはそれを無力であり、不幸である、と形容する)。だから、マルクスが「もしもきみが、相手の愛をよびさますことなく愛したとすれば」というのは、別愛のことと理解することができる。そのような「別愛」の条件付きの愛では、「兼愛」をよびさますことができない、とマルクスはいうのだ。(別愛の愛では、せいぜい別愛の愛がかえってくるのが関の山だろう。)

兼愛の「兼」は、「愛する」という能動態と、「愛される」という受動態のふたつの方向が兼ねられ、それが十全に実現することだと解釈することができる。

➡ わたしたちはしばしば、じぶんじしんが「あまねく人に愛されていた」存在だということをみうしなう。存在それ自体がその証左であるにもかかわらず。わたしたちがなにもの(かになるの)かなどとは関係なしに、わたしたちは存在を赦された。そのことをなきものにして、別愛として堰き止めてはならない、それはじつは知らず知らずのうちに、みずから(自己の利益)を否定していることであった。

➡ ここで想起されるのは、國分功一郎『スピノザ -読む人の肖像』にあった次のくだり。

「人間はそもそも自分のことをよく知らないならば、他人がされたら嫌なことを自分にもしてしまうのだ。だからこそ、自分を知ること、そして自らの本性に従って行動できるよう、すなわち有徳的であるよう、「自己の利益」を求めることが肝心なのである。(p.310)」

このように説くスピノザからみると、現在のロシアのプーチン、イスラエルのネタニヤフをみると、別愛によって、自己をみうしない、とことんまでじぶんじしんを否定する悲劇性をすらおびる。マルクスなら「不幸なプーチン、不幸なネタニヤフ」といい、スピノザ「かれらは自分のことをよく知らないのだ。」というだろう。

(※)「善きサマリア人の喩え」

するとそこへ、ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。

彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」。

彼は答えて言った、『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ』とあります」。

彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。

すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った」。

するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。

同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。

ところが、あるサマリア人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乘せ、宿屋に連れて行って介抱した。

翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。

この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣人になったと思うか」。

彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行つて同じようにしなさい」。